

陸上競歩

やまにしとしかず

山西利和

未来ノート

-202Xの君へ-

やったらできた

競歩との出会い

あるく理系男子

目指すは世界一

毎朝走って 順位上がった

運動が苦手だった少年は、いま、世界を舞台に戦っている。27日に開幕する陸上の世界選手権で、男子競歩20キロに出場する山西利和(23)は愛知製鋼は照れ臭そうに言った。「体を動かすのは好きだったけど、運動神経はよくなかった。走るのも遅い方でしたし」

京都・長岡京市生まれ。父の仕事の影響で引っ越しを繰り返した。幼稚園の年中から小学2年まで東京都港区で過ごし、その後は静岡市へ。小学3年のころに水泳教室に通ったり、社宅の庭で友達と野球をしたりして遊んでいたが、目立つ存在ではなかったという。



①小学6年のころの校内マラソン大会で笑顔を見せる山西利和

②中学2年のころ、陸上部長距離のメンバーとの集合写真に納まる山西利和

(右から2人目) ①いづれも本人提供



校内のマラソン大会の順位は、約100人の同年男子のなかで下から数える方が早かった。それが小学4年のころ、あるイベントがきっかけで飛躍する。

「一人一人にカードが配られ、自分が走った分だけ色を塗れるというすぐるく

のようなものが始まったんです。校庭を何周したら何歩進む、みたいな。触発された。毎朝、授業が始まる前に学校に行き、校庭を走るのが日課に。こつこつと継続すると、マラソン大会では学年で10位くらいまで順位が上がった。「やっ

たらできるんだ、おもしろいなと思うたんです」

成長の過程が自信になった。それは勉強でも同じだった。小学3年のころ、先生だった祖母の影響もあり

公文式に通い始めた。週2回。両親から勉強を促されなくても、のめり込んだ。5年で小学校の内容を終えた。中学校の問題を解いていた。「だって、わかったら楽しいじゃないですか」。希望して進学塾にも通い、中学受験に合格した。

幼稚園のころから始めた趣味の折り紙も、「できあがった瞬間より、つくって

る時間がいんです」と笑う。得意なのは、何枚も折り紙を組み合わせてつくる多面体。2羽がひつつく二つ首の鶴もお手の物だ。

入学した中学の陸上部は、「幽霊部員も多かった」と熱心な部活ではなかった。だが、父の転勤で再び長岡京市へ。1年の秋、陸上

◆「未来ノート」スクラップブックは、全国のASA(朝日新聞販売所)でお配りしています。インターネットの特設ページではイベントやスクラップブックについて詳しく紹介しています。「未来ノート 朝日新聞」で検索してください。